

第2分科会記録

講師：藤井 暁彦 氏（一般財団法人九州環境管理協会 環境部陸生生物調査課課長）

ファシリテーター：大平 裕 氏（福岡県地球温暖化防止活動推進センター副センター長）

記録：橋村 賢次 氏

参加者：12名

【テーマ】環境教育をとおした生物多様性の現実 ～環境カウンセラー継続研鑽～

【講演内容】

講演の内容として講師は、生物多様性そのものの難しさ、伝える事の難しさ、自己研鑽の難しさ、それと第2分科会のテーマである「環境教育をとおした生物多様性の実現」も難しいとの問題提示であった。

環境教育のポイントでは、講師が講習会やイベント等で気を付けている事として、相手（子供～大人）に合わせて、時事ネタ・新たな情報・関心事を取り込み、アオサの成長スピードなど少し難しい事を入れての説明がポイントのようであった。

環境教育では、人間と水との関わりについて、水の循環・森の働きから地球上にある水1トンに対して人間の使える水の量は僅かコップ1杯にも満たない事や、干潟の多様な生物の種類と人間社会との関わりなど、小学生にも理解され易いような図解説明であった。

大人向きの教育事例では、生物多様性がネックとなっている現状において、工事現場のカエルの保全活動から、自然にやさしい工事の必要性を説明して、すべての生物は関わりを持って生息しているので、何かひとつ崩れれば多くの生物に影響する。工事現場でも、生態系の保存のため、まずはできることから始めようとの主旨であった。

【グループディスカッション】

生物多様性を伝えることの難しさという講師からの話題提供について

- ・現在外来種を見逃し、いろんな生物がいたほうがよいという意見もあり、本来いるべき所に生物がいないことが大切である。生物多様性という言葉伝えるのが難しい。
- ・生物多様性の言葉自体が難しい。
- ・田舎では、山菜など全部取らずに次世代のために残していた（祖母に教えられていた）。

子供たちにとって問題なのは、暮らしの中で生物多様性を知らない（自然での体験がないので難しい）。

- ・自分たちの活動は、干潟をとおして希少生物を教えているが、高校のプログラムでは干潟に行く時間がとれない。教育現場とのやりとりが難しい。
- ・人間の価値判断で生物多様性と言っている。カエルの生息地が少なくなっている原因は、農薬・水路の問題であり、農業政策や都市化も影響している。これは、大人

の問題で子供は理解できない。

学校教育とカウンセラーとのつながりについての話題

- ・小学校までは現場（干潟）に入れるが、高校は難しい。
- ・高校になると県の教育委員会への説明もあり難儀である。
- ・地元の小学校はやり易く、桜島では時間が足りないので、子供は授業抜きで干潟を訪れている。
- ・離れた学校では、企画書提出等もあり難しい。
- ・先生ができるカリキュラム（学習要領）を用意しないと難しい。
- ・学校現場も悩んでいるので、学校との橋渡しが環境カウンセラーの役割と考えている。
- ・学校から依頼があればカウンセラー（虫中心）を行っている。その他、地域の老人会や公民館からの依頼も受けている。
- ・町特有の生物（固有種）を守るだけでよいのか。市民の組織づくりをどうすればよいかを考えている。

地域の生物多様性を守っていくための、地域の組織づくり等についての話題

- ・鹿児島市では、パブリックコメントを実践して、学校現場との連携や人材育成を必要とした活動を行っている。
- ・実業高校にアプローチするのがよい。最近実業高校では、生物多様性を取り組み、高校生が環境との関係を地域の小・中学生に職業として教えている。
- ・高校の生物クラブでは、ビオトープを実践しているので、理科の先生とのつながりが必要である。
- ・職業系の高校（屋久島高校）では、授業にも環境コースを取り入れ、行政とも一体となって活動している（他にも測量実習で干潟の保全を保っている）。
- ・職業系の高校に入ると、カウンセラーとしても面白いかもしれない。
- ・学校関係には、年間計画を立てる2月頃に入るのがよい。
- ・鹿児島の漁協では、リーダー育成のセミナーやワークショップ、利害関係者とも連携して、プロの技術を取り組み組織化している。
- ・漁師と連携して、干潟の保全からあさりや海藻を商品化している地域もある。
- ・漁協から魚料理を子供に食べさせることもよい。
- ・地域によっては漁師の理解を得るのが大変であり、課題でもある。
- ・上記の意見に対し、ある地域では漁船を利用したジオパークを開催し、漁師との連携を図っている（漁師も漁船使用料が収入となる）。
- ・ワカサギが減り、ブラックバスやブルーギルが増えている。釣り同好会との連携がうまくいかない。お互いに連携するほうが良い。

【総合的な感想】

今回の研修は、生物多様性を通してESDをより理解することであったが、本分科会に参加したカウンセラーには九州地区開催にも関わらず千葉県と高知県からも参加していた。目的は、ローカルな情報収集と多くのカウンセラーの意見を聞くことが

勉強のようであった。

参加したカウンセラーは、市民部門が大半でありそれぞれの地域で環境保全活動を積極的に実践しているメンバーであった。なかでも経験豊富なカウンセラーは冒頭に、「生物多様性とは何ぞや」と述べ、自らの体験を語っていた。

生物多様性に関しては、干潟に近い子供と山の子供たちでは、生活環境も異なるので、それぞれの地域の由来を教え、子供の好奇心をよぶフィールドワークが大切であり、伝える教育の難しさも現実のようである。

また、ファシリテーターの話題提供に対しては、多くの体験談や意見交換も活発に交され、参加者にとって有意義な研修会になったと感じられた。今後、ますます環境カウンセラーとして、各地域におけるE S Dの普及啓発活動が望まれる。